■「母の死――あるいは家庭写真術入門」（初出『WORKSHOP』創刊号、一九七四年九月。再録『アラーキズム』伊藤俊治編、作品社、一九九四年）より

やはり死というものは悲しいものである。とくに母の死は悲しい。私の母が、昭和49年七月十一日午前九時二十七分に、狭心症で死んだ。前の晩から、背中が痛い肩が痛い、腰が痛い胸が痛いと、去年の夏私のインキンを治療したけど治らなかった、井田さんを何回も呼び出しては注射を打ってもらった。身体中が痛いと母は言うので、病根がわからなかった。外科皮膚科ついでの内科の井田さんはともかくいろいろな注射をしたが効めはなかった。打った個所が痛い痛い、もう薬がまわらないから痛いんだ、もう血が止っているから痛いんだろ、と、いつもの上州女らしい口調で医者に言っていた。私は、左肩が痛い左背中が痛いと言う母を、母の肩を、背中をやさしく揉みさすってあげた。なんとなく初めての親孝行のような気がした。親孝行といえば、親父にはしそこなったので、母にはその分までもしてあげようと思っていた。

電通をやめてから、おこづかいもあげてないし、あんまり会いに行きもしないし、私のアパートからゆっくり歩いても三分もかからないのに。芸術写真家である私にも、やっとコマーシャル写真の依頼が来はじめて、この夏には私にとっては多額のギャラがはいるので、その金で、旅にでもつれてってやろうと、有名な妻陽子と計画していたのに。

母は、昭和八年八月二十八日に嫁にきたというから、もう、この三ノ輪という土地で四十年も『にんべんや履物店』というゲタ屋をやっていたことになる。父にさきだたれた後も、嫁に行ってしまった二番目の姉と弟が母を気にして近所に住んでいたので、その姉に手伝ってもらって、ずーっとゲタ屋をやってがんばっていた。気にいらない客には売らなかったり、悪口いったりしていたというからかなり楽しんでいたようだ。上州の血と三ノ輪という下町の血が、気の強いさぱーっとした女を続けさせていたのであろう。親にいつまでも苦労をさせたり心配させたりしていたほうが親孝行なのである、というのは、ちょっと違うように感じる。それは子供たちのいいわけ論で、とくに母親にとっては、いいわけがない。たくさんおこづかいをあげて、うまいもの食べさせて、たまには高級レストランで無理やりナイフとフォークを使わせてステーキなんざ食わせたり、お話したり、ともかく肉眼で見える位置にいて、触れあっていなければ親孝行でないのである。

妻とガキといっしょに写した幸せ写真を暑中見舞いに送ったって駄目なのである。二四時間も指定席券を買うためにならんで、その間ずーっと母を想って待つパパは親孝行なのである。母へのおみやげとおしめをもち、赤ちゃんだっこして、気のすすまないママをつれて郷里の母に会いに行く男は、親孝行なのである。写真では親孝行にならないのだろうけど、母の葬式写真をつくるために、いつも仕事場においていた母のアルバム帖を見て、それほど写真が親孝行に役立たないとは思えなくなった。私が撮った孫の写真とか、姉や

妹の結婚式の写真が、近所の仲間たちと旅をした記念写真にまざってかなり貼ってある。仕事の合い間に、孫たちの笑顔に囲まれた楽しそうな自分を見て、娘たちの花嫁姿と並んだふくよかな自分を見て、現在私は幸福なのだと自分に言いきかせていたのであろうか。などと考えると、写真はやはり親孝行になるようにも思える。近所の仲間たちとの旅も、それほど楽しくはなかったように思える。記念写真の中の母はまわりが笑っている時でも笑っていない。実際は、旅なんて面白くなかったのであろう。せいぜい自分の体力を確かめるためのものであったのであろう。まだ大丈夫だ、あと五年は大丈夫だ。『浄蓮の滝』の前でペンキ屋のババァといっしょに写っている母には死相がある。

（中略）

母は、「ウッ」と呻くと、そのままであった。母の死を見たのは弟だけだった。弟の風と、体温、ごつい手の感触、そして声を聞きながら、一瞬に死んだ。情景は終った。団扇でゆっくりと、やさしく風を送る弟。母。まさに、それは情景であった。言葉でも、声でもない、一瞬の呻きが、情景を終わらせてしまった。母は死んだのだ。私は、死んでしまったのに、まだ暖かい母の胸に、手を置いた。私の冷たい手を、よけようともしない。私はみんなに気づかれないように、乳首に触れてみた。私はざわめいた。そして、私は泣いた。

さて、私は喪主である。もう戸籍上三十四歳にもなるのに、あまりにも世間知らずの写真芸術家である私は、なんとか親戚のおじさんとか町会の人達の助けで、葬式の段どりをつけて、さっそく母のアルバム帖をめくりだした。生前母の写真をあまり撮ったことがないので、いささか心配であった。さすが、深瀬昌久は、父母だけではなく、妻洋子のも自分自身のも葬式用写真を撮影済みである。あとはその写真のために死ぬだけである。などという冗談はいけない。写真集という言葉があるが、まさにアルバム帖は写真集である。ここには、肖像があり、編集もレイアウトも、どんなすぐれた写真集もアルバム帖にはかなわない。母が編集、レイアウトした母のアルバム帖は、深瀬昌久がニューヨークからのおみやげにくれた『ウィスコンシン・デストリップ』をもはるかに超えている。母が、ここに在るのだ。たとえば、「辛い事でも生き抜いてしまえば楽しい思い出となっている」と中扉に印刷されてあるアルバム帖の一頁を説明すると、前述したが、浅草伝法院で死ぬ一年前に『至徳の古鐘』に手をかけてポーズをしている父の写真、父の死後二年もたたないうちに死んでしまった長男である兄の娘の微笑の写真、末っ子である妹の花嫁姿の写真、その結婚式に私が撮影した母のポラロイド写真、この四枚の写真が無造作に貼ってあるのだ。この一頁だけでも、私は感動させられてしまう。私は、このポラロイド写真の中の母を葬式写真にすることにしたのだ。アサヒペンタックス6×7に接写リング全部つけての複写作業は、母との時空世界であった。ボケの中から現われる母は、またすぐにボケの中に消える。そしてまた現われる。

その時空は、ビデオをも、映画をも、そして写真をも超えていた。私は、母と時空世界にいた。神楽坂スタジオ・アングルの暗室からできあがった葬式写真をかかえていつものように地下鉄にのって、いつもの地下鉄の肖像を見ながら三ノ輪にもどった。「名前が、きんだから金の額縁に入れたよ。」とダジャレをやってみたが、ぜんぜん笑わない。親戚一同、子供一同、孫一同、近所のおばさんたち、の涙にさそわれて、また泣いてしまった。納棺する前に、私は、母を撮った。触れてみた。まだ暖かい。あの乳首を、そして恥毛を、撮りたかったのだが、ガキどもがじーっと私の撮影ぶりを凝視しているので、ついに撮れなかった。祭壇に飾った葬式写真は、母は生きているようだった。葬式写真は、生の代理人なのであろうか。父と同じ、兄と同じ、浄閑寺での通夜には、かなりの人数が来てくれた。下町のゲタ屋のババァにしちゃ、上出来だった。弟は、祭壇の前で母といっしょに寝た。もし母に貯金があったら、全部弟のものである。(母は、私をのぞいての、娘、息子たちからのおこづかいを一銭も使わないで弟の結婚費用に貯金していた。)私は、いつもとは違う疲労のため、また性交しないで、あんがいぐっすりと寝たようであった。

葬式の朝、私は、カメラをもっていようかどうか、トイレで、木村伊兵衛さんの葬式にもらったトイレ陳列台に飾ってある『御清め塩』を眺めながら、ゲリグソしながら考えていた。普通でも貫禄がなくこまこましているのに、カメラなんぞ肩にぶらさげていたら、ますます貫禄がなくなってしまう。ましてや私は喪主である、写真を撮るのはやめよう、

と決心してトイレを出た。さあ、いよいよ葬式である。さっきクソしたばかりなのに、もうしたくなった。お経がはじまった、焼香がはじまった、桑原甲子雄、東松照明、内藤正敏の顔が見える。貸衣装屋がもたつきやがって、まだ喪主の妻がこない。なんだか若い野郎たちが多いなあツバメのはずはないし、きっと弟の仲間だな。やっと喪主の妻がきた。あわてて着たので、白襟がちょっと出すぎているが、まあまあイカしてる。黙礼は喪主の妻にまかせて、喪主はゲリグソがまんしながら、クソ坊主のお経を伴奏に、祭壇の母を見ていた。この葬式写真は、写真である。

私の死後、平凡社から出版されるであろう豪華大写真集の一頁を飾るであろう。うーん、かなりいい写真である。『欽誉浄蓮清信女位』か、死んでしまうと文字になってしまうのだな。それにしても、いい写真だ。ところで、喪主だから、挨拶をしなくちゃいけない。今日は、真面目にやらなくてはまずい。なんか詩的で感動的なことをしゃべろうかなー。あんまりこらないほうがいいんだろうなー。「梅雨の日の、雨の合い間の、この樹々の緑を、私は忘れることができないでしょう」とかなんとか最後に言おうかなー。あんまりキザすぎるだろうなー。とかなんとか考えているうちに、お経は終り、焼香も終り、お棺に釘をうつ順序になった。横須賀功光がくれた花束をちぎって、花で埋めた、子供たちに花で埋められた、母の顔を見て、触れて、冷たくなった頬に触れて、私はカメラをもってこなかったことを後悔した。こんなに、いい顔の母を見たのは、初めてのような気がした。

私は凝視した。そこには、現実を超えた、現物があった。まさしく、死景であった。超二流の写真家である私は、写真が撮りたくてしかたがなかった。私は凝視しつづけた。私の肉体がカメラとなって、シャッターをおしつづけていたのであろうか。小石で釘を打つ音は、梅雨のしめった天空に響いた。あれは、音楽だった。

私が、なんとか挨拶をすませると、うしろで妻が「上手に言えたじゃない。」とひやかした。霊柩車のすぐ後について、車から見る街は、私に、カメラをもってないことを、また後悔させた。父と、兄と、同じ株式会社博善社で火葬、あまりにもわずかの骨になって熱風とともに出てきた母を見て、私は、またまたカメラをもっていないことを悔んだ。あれは、絶対に撮っておきたかった。そして、骨壺に、大きめの骨を選んで妻といっしょに入れる時、あれら骨を、母を、接写したかった。触写したかった。その気持には、かなりの打算がまざりあっていた。それは、写真家としての打算である。人間として失格なのかもしれない。そんなことはどうでもいい、打算的な写真家としての私は、そのことについてまったく反省はしていない。私は、写真が撮りたかった。打算で、写真が撮りたかったのだ。母の死は、卑小な写真家である私を、批評し、糧となった。

解題

「写真家」であり続けようとする決意

おそらく日本で一番有名な写真家。もっとも「アラーキー」という呼び名によって連想される、「女性の裸を好んで撮るスケベなカメラマン」という大衆的なイメージは、この人の仕事の凄みを逆に見えにくくしているきらいがないわけではない。

一九六〇年代から現在に至るまで、彼は日本の写真表現の最前線を疾駆し続けてきた。報道写真に代表される公的（パブリック）で客観的な記録という神話を解体し、あくまでも私的（プライヴェート）な眼差しに根ざした表現としての写真の方法論を確立していくのに、彼が果たした役割の大きさははかり知れない。陽子夫人との新婚旅行を淡々と撮影してまとめた『センチメンタルな旅』（自費出版、一九七一）、そして彼女の死の前後の写真日記『センチメンタルな旅・冬の旅』（新潮社、一九九一）をはじめとして、その「私写真」の試みは多くの写真家たちに決定的といえるような影響を及ぼしていった。

この「母の死――あるいは家庭写真術入門」は、荒木が自分に固有のスタイルを見出そうともがいていた時期に書かれた重要なエッセイである。この頃、荒木は東松照明、森山大道、深瀬昌久らとともにワークショップ写真学校に講師として参加し、私的な出来事を饒舌な文体の〝物語〟として組織していこうとする実験を続けていた。ここでは省略したが、本文中に記さ

れている、多木浩二と共同企画した「写真についての写真展」（シミズ画廊、一九七四年四月二十六日〜五月一日）にも、彼のコンセプチュアルな指向がよくあらわれている。

しかし、より注目すべきなのは、荒木の「私写真」において、〝死〟という取り返しがつかない絶対的な出来事が占める位置が、この文章で明確に定められたことだろう。彼は既に、一九六七年に父、長太郎が亡くなった時、浴衣姿で、まくり上げた袖口から筋彫りの刺青のある腕が覗いている遺骸を撮影している。ただし、この時には首から下だけを写していて、顔はフレームの外にカットされている。

〈母の死〉 1974

母、きんの死（一九七四年七月十一日）は、父以上に荒木の心を動かしたようだ。ここでは、いつものダジャレの多い軽やかな文体は抑えられ、死に至る母への思いがストレートに綴られている。この時は、妹の結婚式の時に撮影したポラロイド写真を「アサヒペンタックス6×7に接写リング全部つけて」複写し、「葬式写真」とした。また納棺の前には母の遺体を撮影している。『カメラ毎日』（一九七四年十月号）に発表されたこの写真は、東京の下町の風習で布団の上に敷かれたゴザの上に横たわった母を、右斜め上から写したものである。

しかし、荒木は葬式にカメラを持っていくかどうか、迷いに迷って、ついに持たずに出かける。火葬後、遺骨となって出てきた母を見て、ふたたびカメラを持ってこなかったことを悔やむ。その気持ちにはむろん、「写真家としての打算」が混じりあっていた。だが、そこで彼はさらに次のように文を書き継ぐ。「打算的な写真家としての私は、そのことについてまったく反省はしていない。私は、写真が撮りたかった。打算で、写真が撮りたかったのだ。母の死は、卑小な写真家である私を、批評し、糧となった」。

一九九〇年、陽子夫人が四十二歳で亡くなった時、荒木は今度こそ「絶対に撮っておきたかった」ものを撮影する。葬儀の時、陽子の死に顔を、そして遺骨もフィルムにおさめるのである。そのことを知った上で、あらためてこの「母の死」を読み直すと、彼がここで人間の生と死に寄り添い、最も近い場所からそのすべてを撮影する「写真家」であり続けようという決意と覚悟とを固めたことの意味が、はっきりと見えてくるのではないだろうか。